新局玉石童子訓

1279
42

1279
42

村田

新局玉石童子訓巻之二十七

東都　曲亭主人口授編次

第五十七回

虐政迫て勇男女囚牢と鬧を
阿甦寺ふ諸俊傑舊主ふ謁も

却説奈良櫻八重作次世ハ女弟押繪と共侶ふ盗覗白日鳶十六郎と時ハ奈我四郎ふ牽甘ろ里長と五保ろる碟助ふ相俱ーて。古の日未牌左側ふ當郡の領主ろる。鏑野郡司紀的の部領の館ふ來ふけるバ里長則先ふ立て腰と屈ろ門卒ふ訴ふ訟人のうーを告げて。找入りて案内知ろ。聞て廳の這方ろる。向注所へ赴くて。支云云と宇上て。准備の目録を呈まれば。執接の書士ろろて。猶云云と問訂ろ。若们ハ例の如く。其盗覗をちち守りて。廳の局ハ内ふ集居上。程ろく御沙汰あるべくそ。とろふ里長額衡義て。退りて八重作押繪

ら号ふ告げて皆共侶ふ廳の局ふ赴く程ふ最苛く伏兵四五名麻衣の四天ふ。脇甲腔衣を。腰ふ両刀を跨へる。或い十る。捍棒を握持て突然と出て来て。訴訟人号と疾視て卒と廳の角門を閉て件の衆人を局の内ふ呼入れて。共ふ非常を守りて在り。小程ふ鏑野郡司範的ハ方僅ハ重作押繪の訴訟と。粗ゆくふ彼号ら既ふ生拘て牽のて来る盗賊ハ最ふ悄地ふ罪と饒して秘密の不正へを課へる。白日ハ鳥十六郎る。夏さ其目録ゆて知られ。かハ心驚て。憂悶へていふ。ま。と思ふのミ。主張ハ。ま。定られ。先母親大刀自ふ告知らせて。腹心の家隷る。鬼薊苛三届梁鍼持隈ハ刺高と。閑室ふ召よ。ま。主僕額と合へて。密譚ふ時と移へけり。と。ハ知るへ。もる。ハ重作押繪ハ件の人々と共侶ふ十六郎とを守りて。久へく局の内ふ在り。郡司の出ると。俟程ふ長ハ夏の日歇て。窓より暢ふ風で涼ハ下晡ふ。へり。時候相分の出させのふぞと。奥の

方ふ呼へる。聲を。有司と先ふ立せて。悠然として立へるを。見れハ。軽的のあらぬ。鬼薊苛三届梁ハ生平より最尊大ふ端近く坐と占て。ハ重作号と佐と見へる。盗賊。これ訴訟人号ら羨れ我君みづから。ま。母のひて告訴の夏の趣と聴せのハ。けれも。目今猛可ふ恙と。ハ。せ。今日の御沙汰ふ及ハれ。若竹ハ。ま。牽のて。ま。ハ。へ。その。鷹巡児と伏兵ふ遮與へて退へ。異目の御沙汰と俟れと。ハ重作ゆ。あ。ま。ハ。ま。ハ。ま。ハ

樅二郎と償はく欲を訴状に具へたの義を仰上られて樅二郎を獄舎より饒
生めらぶ十六郎と交易に伏兵達に遽與も甘へ然もあるいうホーて大事照
況と捨置て豊阿容々と退んやらも果ぎ苛三八眼と瞋り聲苛立て這
奴極めて大胆へ彼身へ武士の浪人とも聞文聽まあるるぐら縄食の下司までも腰に
刀と帯たるへ逆心あるぞあらざらん然れば若仁ぐ牽のて来ぬるその姿覚い白目
とび高十六郎と吸做して做ざるとるた女人ぐれ近曽御掟ふより捌捕らせて獄舎
繋置れ。ふ。ゆる夜悄地に脱去りてその往方知れざれば物色して密々に索らるを
知らぬるや。憶よに其白目鳶に素より韓錦ぐ隊下の女人ゆて受る恩のヨヌけまば
他ら禁猟に代らんとて若仁ぐ諜合して故意牽れて来ぬるるん然らぬ二八ぐろ
ぐるる優少女に狂られて捌捕らるべもあらざるその佯詐と知るべのに遽莫其
虚実と今拷問の御沙汰る。饒して开ぐ儘返ぬ。十二分の好造化るらんに。

己ぐ儘る無法の言守と守とし怕れざ若仁も白日鳶と共に獄舎に繋
ん狡寔に烏滸る白物かるる。権威に誇る非法の高聲只目前の道理斌
枉く主の悪事と涂隱を被る刷毛目の麻衣も浅に伎倆で透融る言果
べくもあらざるとら八重作時八奈我四郎皆慍憤胸に満て睨詰る开ぐ中に押
繪ぐいとで怨に堪ず柳眉を反立星眼も決朱まで苛三と一変時ち見て
却らぬ。相公の出さぬるるべ禀まぬと言ぐれも這白日鳶の招了ゆ左ある
右も御僻支の免れぬ方るければ猛に病着に假托て同宿敷る狐に化ぬ。
有司達に捌せぬ御胸中ぞ知られざ。権威に驕り理と非に枉て十重も
二十重も推龍まで悪事と秘さぬるとも天知る地知る人知る我知るぞの白
日鳶の招ると偽ぐ者詐續ぐ只ぞの甘羅一郡の良賤士民のまで他郷の
民まで竟に知らん。昼よ家兄今日に千萬ぞ加比る十六郎と牽のそかるる。

異日の御沙汰を俟んとのみ八重作嗟嘆ふ堪ぎ押繪ク意見宜定ふ余人
ての生拘十六郎ハ我兄と交易ふ多き多年ぎ
ふとのみ思つも。その時ぎも懐ふ忘ちけ。訴状と合ぎ出て廳の檐廊ふ図て卒とも
ク皆共倡ふ十六郎と奉立て外面投て出ぎ現八重作押繪の所正ふ是鏑
野主僕の悪支を攻る鍼灸を轉ーが死ぎ當然の道理ふ苛三有司ぎ呆れく
口と鉗ーて在り既ふて八重作押繪ハ時八と奈我四郎ふ白日鳥と奉立させて扇の掘
戸推開ぎ出ぎ忘ける程ーもぎ苛三ぎの背の方ふ建る屏風の蔭ーて丁
と打出ぎ銑鋺ふ十六郎ハ背の空射所を梢欠ぎ串れて潑と漬る鮮血と共ふ
一聲呀と叫ぶも果ぎ仰反れて死ぎけ。是ぎ驚く八重作押繪時八奈我四郎
倡ふ後方と伝と見ぎれハ件の屏風と推開ぎて顕出るハ別人ぎ鏑野郡司ぎ軽的
へ蒼色の麻衣ふ小刀を腰ふ帯る長袴の裙蹴返ーて上坐ふ立駐り四下ふ晌く

聲震立て忽ち届然最ぎ緩ー我那里ゆてうちぎ八重作ぎの訴訟
取るーも元詭譎人奉ーて来ぬる十六郎ハ樅二郎の支黨ぎ曩ふ獄舍を
脱ぎて往方知ざりー罪人多ふ饒ーて返ぎ支ぎ我ぎの故ふ敷ぎ留ぎ矧又
押繪とやらんハ女子ふ似げ元大胆不敬領主の廳ぎ憚りもぎく我身主僕を
罵ふ同穴ぎる狐とのぎ今是ぎーも忍べハ何事と狭忍ぎらん一箇も漏ぎ捕
捕り紙最ぎ緩ー敦圉なる下知ふ苛三有司ぎ阿と額衝ぎ頭ぎ拾て
兵ぎ毎御掟ぎ其ハ奴ぎぎ打仆ーて皆絆ぎ。と劇ーく沸る諸聲ふ局の内ふ
伏ぎる雑兵四五名阿と応て身ぎ起ーて内ぎ或ハ十ぎ捍奉ーて
綢繆て捌捕人と斡めぎ事の敗れふ里長ぎ毀物ぎる碟助ぎ生た
る心地ぎ咱ぎも側杖打れやせんと怕惑ひ逸早く角ハ逃ぎ外面
投て走りけ。當下八重作押繪ぎ奈我四郎ぎ時八ぎ支ぎ急ふて一言一

のりまさ
なかにしの弟
ごろう弟
次八作
ごろう兵

のりまさと
範的乱法
誣と
十六郎を
斃を
ゆきの兵
ゆきの弟
ときの八
ゆきの兵

語の問答ふ皇子ければ俱ふ必死の覚期と究めて敢ふ毫も擬議せず雑兵
等の十余の下と極潜ゝ曳抓ゝて亦悲粉ふ做れと投伏々々局の板壁ふ掛う
ける赤樫の六尺棒とをふく取りて打振々々軛的主僕と殴ゐんと找めば苛三弄ふ
有司等の驚噪ぜ立空ゝて共ふ刀を抜翳ゝ一雲時い防ぜ戦ふものから死と究
めて勇男勇女ふ勝ぐもあらざれば或い双と打落され或い腕と折れて堪ぎず
共ふ逃走れば軛的い勝負と俟ぜ慌忙怠惰難て奎くも奥へ退ぜ一より
ふあ者いあらぎるるる八重作い勢ふ乗ゝて奥へうち入りて累る怨と雪んを
と惴ると押絵い推禁めて屋ふ家兄開ゐ危ゝ我们絶ふ四名中奥まで入い
らば捕ふせられん竟ふ免れがゝとも大兄と救出ゝんそ但死と俱ふ出べるのと
ふふ八重作時八奈我四宣是ふ然へと応へゝ檐廊の傍遊る石の多浮盤ふ附ら
まる柄杓ふ水と汲含ゝて俱ふ咽喉と潤ゝて外面投て走出れば既ふ鳩る加勢の

雑兵甲乙都て十餘名迸ぎ遣ゝと推稠ふ籠ゝて八重作ふ物ともせず逆進と
ゝ棒閃ゝて息とも艱れぎ戦ふ小程ふ大江峯張両王僕の今日の讐断西
ヨヤくゝて吉寡かんと思ひ一かば郷尚ふ八重作ふ推續ゝて門内ふ紛れ入りて問
注所の這方ふ小離邑の裏ふ立躯て彼身の安危と知らずくるふ百夏の日
既ふ西ふ淪ゝて黄昏近くるゝ一時候聞文聽の局ゝ方ふ人の罵り噪ぐ聲ゝて
走出る里長と成勝背より掖留めて問ゝて茲ふたゞめて知る八重作押絵の訴
訟い思ふも仮ぎ破敗ふ及び一支の難美ふ驚れてうち入ゝて援人狡ぎ来ゐるを
俟ゝ狡と思難ゝ身と固めて猶も便宜と覗ふ程ふ八重作押絵時八奈我四皆
大小髪るらぬいるゝ局の内より走出ける撞見頭ふ加勢の雑兵突然と集来て
捌捕んと斡めゐる背後の方より成勝通能顕ゐる聲高ゝふ白猪の兄妹
ゝ強れ我们既ふ茲ふ在りいでゝ路と啓んぎと呼りゝ共侶ふ刀と晃りと

引抜て驚に見くるる雑兵を右と左へ斫仆も金這両曲の援兵時に取て百騎千騎に見くるる八重作押繪等の勇氣たぐめ一倍して仆さるや應と前後より透もあらせず撃る散せば雑兵等の辟易して半死半生なるもの絶命と免れ走るに脚に信して逃走るを八重作押繪奈我四時八成勝通能共伴に猶逃さじと追程に聞文所と相距者六七十間ばかりて土牆あり蒐と呼ぶ異龍たる這處に獄舎ありけり件の六名の勇男女の料らぬ茲に来れば獄卒等驚見て狼狽児あそ出来れば罪人を奪れそと呼ばりて六七名各棒を推乃へて走出て八重作等と撃仆さえとそ群立鬼れど八重作等に一歩も退くに押繪も豫懐に短刀を抜持て當るに任して斫仆も況大江峯張の双尖に向ふ者首と軀と相別れて仆れざるるるけるに然れば八重作奈我四時八共に屠龍の術を聚ぶに然しも猛なる獄卒七名死活に知らぬ仆れけり浩りー程に韓錦樅三郎に單這首の獄舎に

在り事の仔細に知るるよりあれとまぐ暮果ぬ明りに格子の内より透して見れば今獄卒等を斫仆なる其人々に我弟妹と友人弟子なるもあれば驚に赤欺びて夜よや八重作押繪等に我樅二郎に茲に在り救へと呼ぶ彼衆皆齊一見かくて應と答る八重作時に奈我四郎も共伴に獄舎の格子に て掛て毀開らく欲れども方三寸ばかりの堅木とのて造立る格子戸なる八重作奈我四時に身に受る浅疵なれば俱に力を勤しても早に開くもあらざるに押繪に見々喚禁めて家兄に時もや程ら退くゆせ術あらとて両袖巻揚る其首に建置る圓柱に大に撃る鈍打る罪人を責る時是に撃ぐ為なり押繪に件の圓柱に両手に掛て力に信して礫と働く响と共に摧破れく出入自由に做りー樅三郎に且感て且欺びて獄舎より身を斜に脱出る八重作

ら相迎へて斫伏せる獄卒共の腰なる刀を分捕して樅二郎が渡し押繪が長刀を授けて。却何里より脱去んとせ。俱に四下を見かゝる程に成勝と通能が人より先に見出しかば獄卒小全の蔭に樅を支給たるの竹階子を合せ下し来る土牆の便宜の所に建樅れば衆皆是に便を得て攀登る者都て七名樅二郎を首として八重作押繪成勝通能時八奈我四郎辛くして外面に下立て宛画る猿猴の水月を捞る如く迭に腕を蔓に携へて輒く下る程に蚤に已に肩階子を假して帮助るもあれば。開ぐ中に成勝通能が皆下立ける後に徐に階子を登りて。やがて階子を曳抗て下立に塹に投掛て皆共倍に渡しけり。然しも修錬の剽捷と皆目覚く思ひけり。這頭に鏑野軍的の後に前に程遠く諸人通行の官道なれば龍潭虎口を猶脱れて後安に似たれども。いまだ去向を定ざる左も右も白猪の宿所かゝるべきに。あらぬ直に妙義へ走んと欲とふ商量のまゝ央に至らぎ前後の門を開

せて。追蒐出来る絹捕の頭人西の方より鉞持隈八東の方より蒐薙剣苛三騎馬の打扮一容にて陣笠両刀苛く隊兵合て五六十名挑燈蕉火白昼の如く照き火光に透見て叛逆人共が那里に在り脱しなせと呼はりて東西齊一稠龍る。然れば再度の大厄難に免れがたき樅二郎八重作押繪成勝通能時八奈我四郎に至るまで敢又戦を好まぎ俱に刃の折れるまで殺散し駁る退けて。白昼の甲夜間に紛れて俱に走んぎとの心合されど勇士の本性なれば刀を引拔て西と東に別れて。競ふ絹捕の雑兵を中るに儘せて殺拂へども他人大勢。躬方に七人寡なるに衆に敵しがたき。孰力同じかざれば所詮刺ども輒くに路を啓くふ事なく奈我四郎と時八が竟に刃を打落されて搦捕る程もあらば白猪の坊の方より忽ち。馬として走り来ぬる。侠客力士三十名或に竹槍長柄の鎌或に朸連枷なども挾なる開ぐ中に頭人なるべし。両箇の武士なり。芭蕉布の野袴に信濃麻の戦袍なり

大音。腰ふ両刀を跨へて毬像なる桃燈の細柄を袴板ふ挿まふ一尺有餘なる。鉄扇をぞ采うける。當下件の両箇の武士。近づく隨ふ聲高く呼ぶ。韓錦の黨。ちろ安れ既ふ援兵来れり斯云者を何人と狭まる。當國妙美我山下の人氏和田十郎橘正忠其子小十郎正義ぞ茲ふ在り。衆皆找めと駈立る聲共倡ふ恤雄の壮佼甲乙十五六名數ならねども鴨脚短平もあるめと名告被け先を爭そ。短兵急ふ攻立れ。憶ふぞ是ふ氣を負る。韓錦ぞの男女五名枯る苗ふ雨降沃ぐ轍の鄉鮒の水ふ逢ふ威力たゞめふ同かるもなるや応と用ゐ合して奮擊ふ突戦ふを盡せば絹捕の衆兵乱噪ぐ。歩列跟蹌ふる隨ふ正忠の後陣の壮佼是も亦十四五名先ふ進み。躬方を援けて三七二十一ふ擊ふ散ふ然程ふ和田の一家男小十郎正義今茲二八の少年なれども武藝胆勇一人當千故ふ〜巧石の御曹司と紀平治夫と兼なるや。連りふ礫と投かけて。瞬く間ふ絹捕の兵を打仆ふ者五六名其拳ふ逆ふ者免れがて見えかぶ苛三隈八ふ鬼胎を抱ふ馬乗放て躬方と盾ふ做ふ。ちら忽地城館の塀裏ふ長柄の桃燈を刺ふ勇士なるべ〜両箇だふ踏續ふ台ふ陟りけん半身を顕して慌る聲高ふ喊絹捕の人々ふ鬼神剣主鉞持主方僮御館ふ異変あ。大刀自御前の召るぞや其逆黨ふ打散して疾参りねと呼る聲を。苛三隈八ふ苛三隈八ふ衆兵並て慌噪ぐ。更ふ戦ふ素破夜叉を出来られ退やと叫びつ門内投て入らまくする。正忠正義其隊の力士なる大江山峯張韓錦男女の兄妹透もあらぬ猛猛ぞの群る虎と駈走らまるふ髪ふ鬼たる威勢孰欲當るべ〜或ふ斬れて仆るあり。或ふ擊れて平張あり。或ふ塹山ふ滾び落て半死半生なるもあれども是を扶る者さへなければ捌捕る時八奈我四と八重作押絡ふ復されて。咄と頽れて逃走る其隊ふ先ぶ苛三隈八騎なる馬を

敵ふ奪れて前へまで逃て多く開よくと呼ゐて角門より稠入りける三隊の雑兵六十餘名ヨヌくに駁れて逃かる者二十名ゐ過ざりける當下正忠成勝通能の射方を制めて逃ると追せ来て痍負児を扶助させて白猪の方ふ退くふ當晩の分捕少からぬ雲珠鞍置たる馬三頭大刀副刀十ゑ捍棒ふ至りて数るふ逞ゐ有右而正忠正義ハ勝閧ニ〻び揚させて列を正ゐ白猪の坊まを皆共侶ふ退く程ふ約莫這頭の坊賈ゐハ今宵の恩劇を耳驚ゐけ各門の戸と鎖て寂寥として音もせを开ゲ中ふ這防盡處ふ野蔬の市場あり朝市の建毎ふ近邊の壮客名ゲのて来ゐる瓜茄子其餘何れも菜蔬の類と其間九ゲ受合て一要時積措く菰屋ありけり人住屋ふあらざれば席薦ゐどゐ布も儲を夜ハ戸を無しの。素より守人のゐけれ和田正忠ハ先ふ立て權且這里ふ憩んと妙義より引ゐ来る一箇の従者ふ吩咐て其戸を巻抗されば成勝通能縦三郎八重作押

繪を首ゐ時八奈我四郎短平ゐ這餘加勢の力士と共ふ甲乙都て三十餘名皆共侶ふ立て各意衣を盡さを當下成勝通能ハ今宵痍負者の為ふ腰ゐる仙丹と合る生ゐふ金瘡児ハ十餘名ゐるふ今ハ藥のヨヌかゐねば短平ゐふ藥せて其ハ頭ふ在ける桶の水ゐて仙丹と解ゐ八重作押繪時八奈我四郎其餘も刀瘡ふ塗ゐる且その藥水と飲ゐる即效ゐ深痍も是より二三日の程ふ皆愈ざるゐけり小程ふ縦三郎ハ必死の獄舎と拯ひ出されて憶ぎも籠の鳥の舊巣ふ還る心地ゐれども其所以を知らざれば思ひ〻ふその時押繪八重作ゐ支如此々と告ふ昨宵押繪ゐ生拘ひ盗巳十六郎の招道を告訴の便宜を為ゐ〻ふ軍的王僕の奸虐ゐを詐偽として少容れ軍的反て銃鋺を飛て十六郎と殺ゐ〻支の破敗ふ及びゐ胞兄弟一緒ふ死ゐバやと思定め破獄の顛末又成勝通能ハ昨宵八重作ふ相俱ゐて妙義より

かへの為で今日も亦八重作押繪もの資助ふ做りしまでも樅二郎ハ安果て感嘆ふ
たく却の為ろ我女弟ゑとそ為言ふわゝ為ど昨宵押繪微りせば孰秋彼盗賊を捕へて
我身の寃と解んや況大江峯張両君ハ交友知音の為ふも其身の安危を擇ぜ
ず彼折助剣せられざハ八重作押繪時ハ奈我四郎猛しとふ言ふ獄卒ま
でも斫盡して我樅二郎を救ふさんや実ふ感ぜるふ餘りあり夫百足の虫の死て仆れ
ざる者ハ扶助ヨメ云ふ持べ者ハ弟妹ゑ知己良友の信ふてとゝ只顧感嘆ぜり
為を側ゆる正忠父子以下の力士ゑ共倍ふ寔ふ然へと應けり當下八重作ハ押繪
と共ふ正忠父子ふ謝して為ふ已ゑ死と辭せ為て屋矢敵と戰ひ為ふ兄の
為ふれハ今さらふふふも足らぬ貴老ハ他郷の人ゑふ已ゑふ推續して到来せられし
のゝゝらば這地の力士を駈催して彼門前ゑ追隊の多勢を駆る退けのもゝん神出
鬼没の妙ふ段彼折援兵多くハ我们ハ大刀とれて竟ふ虜ふ為ふむぎらん料らざり

ける幸ひ為ふ成勝通能樅二郎以下の毎奈我四郎時ハ共ふ稱て已ぶり
為と正忠ハ少あぜ不古其義ふも亦故あり奈良櫻主の知られ如く大江峯張共倍ふ
彼山猟と見て かへるさふ韓錦の夏云云と不虞の寇躬阨と守ふ有數ふ胸の安
からねば防守主ふ相俱て和主達ふ推續ゑ白猪ふいゑと議ぜる程ふ孫兒小十郎
正義も四ふまくりとふふふ他と従者一名と将て防守と共ふ主僕四名連ふ路
次ゑいて為ゑ今日午過る時候ゑ既ふ白猪ふ遠ゑぬ甲文の茂林の那方ゆく
隊相識鴨脚短平の来ゆるふ逢ゆゑふ昨宵押繪少女の白日鳥と称ふ盗
児と生拘しとふ一奇譚ふ驚ゆゑ為ゑ今さらふ歎べしさも一入宅ゑ路次ゑ為ゑ
白猪の宿所ふ来ふけるふ五保のゝ留守して在り和殿兄妹大江主僕八里長等ふ
相俱して両箇の弟子時八奈我四ふ白日鳥と牽せる郡司の御館へ来ゆ
亭午の時候ゑ為ゑ支詳ふ知られ為ば喜悦意表ふ出るのゝゝ為ゑ思へば

ふ何とぞ忠許ふえんよりもあれい防守曳と商量まう主ふ宿まで俟んとう彼門前まで赴
ふて韓錦ゐを迎んとて鴨脚を案内ふて我们父子防守曳従者ふ相俱ゑて彼
門前まで来ふけるふ那里ふ憩ふ茶店ふどあるを久ゑく立在ふ怪めらく
ゐのゑあらんと思へ心賦て退ふて便宜の茶店まで俟程ふ韓錦の弟子も亦弟子ふ
らぢるも早く風聲を少知りけ恩を感ド威風を慕ふ壮佼約莫二三十名漸々ふ
集ひ来う今日韓錦の救ふあるを俟ふて相迎んとて共ふ茶店ふ憩て在う是ふよりう
我们ふその衆人ふめられのふ隨ふ向試るふ皆是俠客力士ふて我毎ふ相似る
同慕の志是ふもあらぢれば迭ふ憑ふ思ひあう是ふよう短平ふ云云とうるさ
せて韓錦の尼解けて告訴の人々と共倍ふ出ふて来ゐると見るうふ走りかゝて告よ
とて彼門前ふ跟置ふ久きくるるまでかう来ぎ既ふして波輪刺を下晡ふなりう
時候短平ゞ走来ふて已ふ告るゑう方僅五保の碟助ゞ大く怕れ一面色ゆく

彼館より走出ふて追蒐ふ曳駐めて告訴の首尾を語るふ碟助曳ハ息吻あ
へぎ然れべとも其支ゑれ郡司の相公の暴虐虐做を證据人ゑる白日鳥ふめを
せぎ銑親ゆて結果けて賸奈良櫻兄妹と搦捕せられる禍鬼二さび起
アーゐ里長刀徐さ〳〵我身さ〳〵側杖打れて連累ふ做りもせと怕惑ふて辛くも走
出ふて告げもゐ果ぎ振放ふて飛ゞ似くふ逃去りゐと告るふ驚く我们と共ふ
散動く力士の毎素破事ふて出来ゑれ郡司ふて法度を枉る暴虐戻ふ孰教従
ふべ其義ゑべせ術ゆ徑ふ彼館ふ推よせて門戸を破り塀を毀ちても打入ふて見
物見せん早く准備とせよかと罵りう共ふ退ふて時と移さぎ竹槍捍棒連枷
ゑゞどを引提来ゐる其間ふ防守曳ハ我正忠ふ呼く曰ふ壁言那壮佼ちの資助ふよ
アて韓錦を極ひ出ふ辛ゆとも再度の追隊を防ぐ脚溜の西安害ゑくハ思
慮浅ゆふ似くう愚按ぎるふ阿甦寺の住持閑廂和尚ハ素是出家人ゑ是ども

善ふ與ー悪と瘴。志ある者ふ似ち。況先住の老和尚ハ俗姓肥後の人ふして。菊地ふ舊縁ありと欲ゆふ。郷高ふ已屋安参詣して。疎くらぎ。より迭ふ知己の思ひあり。今彼寺ふ走ゆて。閑雅和尚ふ相譚つ。拒まで集會の義を許さるべー。咱ちら文墨を投とーて。且年既ふ老。これ戦の場ふ臨ゑて。堅と摧ち鋭と辟く。壮佼们ふ及ぶべもあらぎ。然れど身ふ相応ー。火急の使奴ふ立べ。うんぬの義。誰何と談せらる。开も堅要のあ。れ。ふ。ゑー。と。応へ。翁と彼寺ふ遣ーたり。浩りー程ふ躬方の衆人ハ。さび集ひ来ふ。ける。折ふ。鏑野の館の方ふ人。罵叫ぶ。聲ふ取る。如く。ゆ。えーゑ。衆人。齊ー。驚ち立て。那里の安危。心許ゆ。ー。疾。打。先。よ。の。後。れ。ゆ。せ。と。罵。り。器。械。器。械と。引。提。て。走。り。も。ち。く。ま。る。と。咱。ち。一。亟。妾。時。と。椎。林。ふ。め。て。各。位。ハ。勇。あ。り。義。あ。り。筋。力。飽。き。て。悍ー。とふ。も。ま。ず。軍。陣。ふ。熟。ぎ。ぬ。あ。ら。ず。必。勝。の。利。を。ま。ぐ。か。ゑ。べ。ー。我。ち。如。義。の。山。里。ち。る。和田十郎正忠ハ楠公より相傳の兵法陣列武藝を人ふ教ると

りて家業ふ。ま。ち。れ。ハ。我。名。と。ゆ。ゑ。ゆ。ま。ち。も。あ。ら。ん。尚。少。年。ふ。あ。ち。れ。も。拙。郎。正。義。も。あ。ふ。あ。り。我軍配ふ従んや。とふ。ふ。衆。皆。異。説。も。ち。く。開。ち。布。ふ。所。ハ。教。と。ハ。来。ち。く。欲。ち。と。ふ。因。て。即。坐。ふ。隊。配。と。定。め。て。三。十。餘。人。と。二。隊。ふ。分。ち。て。則。先。鋒。の。頭。人。ハ。小。十。郎。正。義。と。ち。て。も。後。陣。ハ。正。忠。将。と。ー。て。去。向。僅。ふ。三。四。町。を。只。一。跨。ふ。走。り。ゆ。て。見。れ。ハ。果。ま。て。和。殿。胞。兄。弟。大。江。峯。張。共。侶。ふ。彼。門。前。ふ。て。衆。兵。と。鏢。と。削。る。血。戦。の。最。中。ゆ。て。あ。り。け。れ。ハ。逃。る。猶。豫。せ。ま。ヨ。勢。の。敵。と。殿。を。磨。け。殺。散。ー。て。本。意。の。如。く。和。殿。ち。を。救。ひ。込。て。ち。ゆ。ゑ。れ。と。躬。方。の。来。歴。加。勢。の。始。末。を。言。詳。ふ。告。げ。ー。れ。ハ。八。重。作。ら。ふ。も。市。ら。ま。共。ふ。ち。ち。ち。く。樅。二。郎。成。勝。通。能。押。繪。時。八。奈。我。四。郎。ち。ふ。至。る。ま。で。感。謝。ふ。堪。ま。ず。素。服。ー。と。ヨ。く。ゆ。ぐ。ー。て。も。稱。け。る。开。ゞ。中。ふ。樅。二。郎。ハ。恭。ー。く。謝。ー。て。ふ。ち。ち。我。身。不。肖。ふ。あ。れ。も。幸。ひ。ふ。ー。て。諸。君。子。の。資。助。ふ。ち。て。萬。死。と。ち。て。一。生。と。ゆ。ゑ。り。け。る。悦。び。是。ふ。優。も。を。着。ち。。。ふ。ら。ハ。ば。茲。と。退。て。共。ふ。去。向。と。ト。む。べ。ー。就。て。時。八。奈。我。四。郎。ち。ハ。各。宅。眷。ある

るるふうちに捨置べし捕られん走りかゝりて妻子も倶して阿甦寺に来よかと云
へば正忠も共に行まうと口の内の毎のこゝろぞ今宵加勢の人々も妻子ある者ヨヌクベ奔
く宿所に かゝり西にて資財伏器を取斂め宅着と倶して阿甦寺に来會勿論な
べしとふと衆皆悦あぐ我们附驥の幸あり義烈の隊に容られれば妻子と見か
へるに遑なけれども然れども棄殺せば計の足らざるに似たり暫時身の暇とゆるべ。
と応へて躰て時へもと共に宿所に退る者十二三名に過ざりけり其中に短平に孤
獨なれども鶴脛の封帯助に ゆるべに者なれば とそ 樅二郎が指揮して他とも共に遣りける。
當下和田正忠に妙義なる妻と捨るに忍に の地の異変と告知せ とゝろなさせ
あるべくらんと倶して来ぬる一箇の従者に言如此々々と吟明て此の路背へと取せる。
通宵路と走れとそ妙義の宿所に返りけり。左右まる程に夜に初更に ゆるまでも二
たび緝捕の衆兵の追蒐まぎまりけるに亦是故ある古又なれども併此義士なる辛

ひに して今に あるも心に被る隈も なけれ早く阿甦寺に造んとそ市場の菰屋を立
て列と正するに毎に和田十郎正忠父子韓錦樅二郎禱鯉茂洋其弟奈良櫻
八重作次世その女弟ヨヌカの押繪浪速の旅客大江杜四郎成勝峰張茶六郎通能と
首あそ其隊の力士三十餘名分捕の馬二頭と牽せて雲斂して隈もなく月を燭に整
整と件の梵刹に近づく程に遠望の為に出される道人走りかゝりて李彦に報に
けり。當下松煙齋防守玖四郎李彦に青法師と共に二門に出迎へて来ぬる人々に
對面あり引て客殿に赴く程に力士ども件の馬を道人に預け且秣と飼せて然て次の間に
集合けり。程に閑廂和尚に沙弥道人に吩咐して豫准備の白粥とのそ来會衆
人に薦めそ疲労と慰めるに是に至て李彦に郷尚に躬方の苦戦の一條且全勝の為
体と物語そ歓びなぐるもあらぬ共に去向と商量あるに這客殿に南面して夜風程
よく吹入れるに蚊さへ蚊さへと稀へ然れば這席なる人々に有繋に疲労なるに

或い柱に背を倚り或い肱を枕にして憶ぎ眠と催さずして當山の住持用廟和尚い蟬の羽より薄き法衣の袖に持る拂子に雪の柳の風に靡く髪に髪る童顔仙骨殊勝なり。一箇の幼童に燭を秉せ又一箇の美少年と年五十有餘る一箇の法師と従へて。方丈より出て来れば義士等驚き身を起して席を譲りて請待す。其坐稍定りて和尚義士等に初對面の口誼最叮嚀なり。却て和殿等今宵の挣に季彦吏の告ぐるに依て殆驚き思へり。公道をのれ是非を論ぜず。其地方に居て領主に叛く罪反逆に等しかるべし。開き凡庸の徒敗れ。鏑野氏い必討べし。故何とならば軍的の暴虐なる。奸詐とのれ人を欺き威權とのれ民を虐げ貪れども飽とせず富とへども足ることを知らず流涙に堪へず人の妻妾を犯し性悪に堪へず人を憎み是とのれを下風に立其禄を食者共に主の悪を資て民の毒蠱毒に苦ぶるなり。又口はの文のごとくに軍的の父郡司軍射に故の郡領部領

朝臣武茂の家老なりし武茂本性柔弱なり彼身に病ありけれい一郡の政事を皆軍射に任用せず程に其權おのづから下に移りて武茂いあれども名ばかり。軍射の人となり人を欺く才あり民に與る私恩とのれ民の欲せざる事に伴りく君命と倡へり是をのれ一郡の民皆軍射を德とし武茂を怨る者多し。又軍射の妻大刀自い内訴の義さへ允れて常に奥まで出入る。武茂淫酒と虐めを剰へ言して夫婦の中を裂に至るかの如くなるに年あり既に鄰國に武射竟に扇谷朝臣主に密訴して武茂自立の志あり是をのれ甲斐國に武田氏に諜合して兩管領を攻せく欲せ臣に軍射面と犯して屢諫れども其甲斐なく反て既に千の胸を裂んとせ事既に急に故に已むを得ず忠告仕りと宣へ一郡の且怒りて日ごとに逆兵三千とのれ部領の館を攻撃まるに軍射内応をして一郡尾の如くに解けて防ぎ戦に者もなく終に忠義を知る者ハ主君武茂と共に腹

誰知忠義
在細衣
利剣當自
佛手出

加さう
和尚
魚丸
きらまと入道
ちうちまん
まるひと
るうかう

斬て敵の首を含まれぬるぞ。然れども乱軍の武芸の内室さらぬ二箇の郎君魁孺后孺一族郎黨数を盡して這里那里にて皆撃れて免る者多けれども既にて範射は思分の隨の主と作て扇谷の媚ざるとうくいで這回の勸賞の當郡の新司に欲せと只管の乞禀あるかば朝興則その義を饒して京師へ使とせあらせて空町殿の告禀をよりて範射願の隨意新郡司を補られける旨に至て部領氏の子孫絶なるの仰られぬ尚幸の武芸の住へる垣衣と唤做を妾の腹の武芸の落胤あり懐抬八月の及べるを武芸の亡ざる時に範射悄地の大刀自と計りて垣衣と人知れず殺さまく欲せ一の垣衣の兄る杵臼七郎程栄と唤做を者早く其機を猜しけ有一夜垣衣を窃にて往方も知らぬるりのけり其程栄は別人なるぞ迺拙僧の徒弟る。この法師のいぞや。是より後の事共はこの沙弥ちそよく知られ愚僧の代りて諸君子の志願を告げて乞ぎとられて杵臼入道は應とあて膝を找めて義士を向ひて却の目今師父の告げられ。野袖彼折垣衣の俱に他郷の走らまく欲ふ。脚小を携て間路を辿らば幾程もなく追隊の兵の逼られて捕るるもあらん世の常言の燈臺の下暗しとあるのふれば權旦この地の躲居て追隊の奴を出抜てこそ徐の他郷の赴くべけれ阿甦寺の住持閑廟和尚は師檀の好あるとて豫意哀と咽に告げて憑禀たりけれ一要時那里を隠屋の做を中にて尋思とあて當晩垣衣を伴て當山の潜ぬ。師父の憑禀をば一議の及ぶ許容あり猶も外者を避んの為の我身へさそ垣衣さへ悄地の頭髪を剃毀をて我法名を趙心と賜り垣衣を周晋と命けらる。是よりの後三二十日當寺の空蔵の身を潜く彼毒氣を避る程の追捕の沙汰も空ぎるる是の垣衣と共の男女の頭陀の打扮隨即師父の紹介より信濃の川中嶋より程遠の空淫寺の赴ぬこの門前の莽を締びて世を潜びてありける程の垣衣の女僧周晋は安らの産の紐を解て武芸

朝臣の後腹の郎君生れぬひわけの兄妹本意あり教び乳ども愚痴苦艱難ふ
べうもあらでい莊子ふ所云轍の鮒の泥ふ吻くふ似るとして郎君の乳名と轍魚丸と
名づけまゐらせ又或とへい和訓の隨ふ和達魚丸とそ喚做しける有低一程ふ鏑野
郡司軌射い戦逆の後僅ふ三稔不美の富貴ふ誇しふ逆謀の天罰到るべし他ど
最愛の扈従ふけ某ひと唱做せ美少年主と怨る吏やありけ有一宵紀射
の睡首と刎て彼身も自殺ちとふ世の風聲ふけえとうあら料らざる事いそ最
も愉快の吏乳ども軌射の獨子ん軌的い當時總角ふけると母親大刀自後見して。
政ぢ〻ちければ一郡の民叛く者ふく已ぢい猶跼りて冈を覘ふ便ふ乳ども魚
丸君い稍成長りぬふ隨ふ其性最伶利くて骨相も鄙ふらぢをきくふ習讀書と好
て武藝も亦密々ふ其貯意ふふあらぢ今茲い年稍十あまり七ぢ〻做りぬ然れば與
復の志身ふ漆るまでふ孝義両ふ淡ふ孤ども人ふ告ぐ乳とるわば絶て羽翼を

ふ〻ぐかりしふ思いたや諸君子の我為ふらぢを軌的と深く怨るとへ對治の軍謀あ
らんとふ我主僕の洪福と乳よ郎君年来の宿望を告げて諸君子の補助を憑
ぬ〻ぬ〻ぢやとへい魚丸共ぶしく義士ふ向ひ禮を正しく我身不肖ふあれども倘幸ひふ
各位の武勇を借て賊臣と討滅して舊領ふ立かへる日のあるべ開ち諸君子の賜
りの乳母周晋い淫寺ふ留守して在り是答のよしを安知らべさえる教びんらい
でくとだろふ感涙坐ふ唱て亦他事もふく見えべ衆皆感激せざるもふく茲ふ創て
その一奇譚を安ふて教びも大きをもぢ開ぶ中ふ八重作押繪大江主僕と共ふ我
們郡司の非法ふ堪ねば命と免れん為ふのを已とふぢ囚牢を破りて緝捕の士卒を撃
走せを快とい思いざりあふ魚丸君の奉為ふ後の戦ひを做せ時い義兵ふて忠孝の
名あり。孰狂叛逆とふべえやとへい樅二郎領して我ふ他郷の流寓児を武茂亡ひ
ぬひし比い我身總角ふるとのく然りとへいも知らぢ紀軌射父子の奸悪ふ小莽操

とかくのこと憎しくと怨むれば衆皆然りなりと応じて共に嘆息をしける。當下成勝運能
趙心法師と熟視て成勝先問ての事卒尒に似たれども御坊は先月某の夜
分信濃路なる客店にて已れの為に部領の荘の名の錯誤を云云と解示しぬ。
行僧はあらざるやとられて趙心驚駭なるから大江主侯と熟視て原来其夜の旅客の和
君達にてありけるよりの地は已れの故郷なれども今も外者と憚れて立かへるまぎりけるに
今茲は先君武茂朝臣の十七回忌なるとて其義を師父に告んとて悄地に當寺に参詣
あけるがさてはいかに徒而昨日その年忌の本沼丁ら母のへ魚丸君に俱しまつりて又當山に
潜歩して法莚供養を果されば明日は信濃へ還らんと思ひ設けに思ひ給へ今宵諸豪
傑に邂逅して事の便宜を図らべしとの鬼神不測の妙契なる欤と只管感嘆をしける。
その段は盡されば又巻を更めて且下回に解分るを聴給へ。

新局玉石童子訓巻之二十七終

村田